

初級修了者のための会話練習案 『日本語5つのとびら - 中級編』での試み

清水 昭子

アブストラクト

立命館アジア太平洋大学（APU）の日本語部門が作成中の『日本語5つのとびら』はゼロスタートからの一貫教育の特徴を生かしたものである。筆者は中級以降の口頭表現能力を主に担当した。作成のポイントは上級へスムーズに到着できるように、練習が段階的に行われ、繰り返し行われるようにしたことである。

中級編の対象である初級修了学生は、話し方の問題点として 文以上の長さで話すことが難しい学生がいる、相手の話を聞き、自分の話を聞いてもらうという、会話でのインターアクションが少ない。この問題点の解決のために、本稿では、作成教科書の中級編での練習のポイントを具体的に説明する。

キーワード：初級終了学生、話す、段階的練習、繰り返し練習

1. はじめに

立命館アジア太平洋大学（APU）の日本語部門は、4セメスター2年間の必修科目のために、入学以前から最終レベルの上級に至る計五冊の教科書『日本語5つのとびら』（『とびら』）を作成中である。その特徴は、五冊の学習内容と学習スキルについて段階を追って繰り返し学習しながら進むという、ゼロスタートからの一貫教育の利点を生かしたものである。

APUの日本語必修授業の最終目標は、3年次からの日本語による専門の授業が受講できるように必要な日本語能力を身につけることである。つまり、3年次からの専門の授業で、専門語彙が分かり、専門教師の講義のスピードについていけ、講師配布の資料を読み、専門のトピックについてディスカッションできるという目標のために、日本語必修授業を設計している。『とびら』はその設計に沿い、目標に到達できるように作成されている。

筆者は、中級以降の口頭表現能力（「話す」）の養成に関して主に担当したが、上級へスムーズに到着できるように、段階的な反復練習が生かされるよう工夫した。本稿では、教科書作成に関し、特に中級学生の口頭表現の問題点について考察し、作成教科書での取り扱いについて説明する。

2. 初級終了学習者の特徴

まず設定している初級修了者の口頭表現における特徴について述べたい。ここで言う初級学生とは、日本語能力試験3級合格程度の能力を想定している。能力試験は理解を測る試験であるから、合格者は3級程度の文型語彙の過半数を理解していると考えられる。¹

APUでは、初級段階で2回の会話テストを行い、日本人学生及び日本人との交流会を計4回授業で行っている。このテストと授業での学生の状況を観察すると次のような特徴が見られる。

会話テストから分かる問題点は、テストしている教員の質問に対し、最終テストの段階でも文以上の長さで話すことが難しい学生がいることである。確かに、教師の質問が理解できないという状況はまずなく、なんらかの答えはしている。しかし、段落が感じられるまとまりを作って話している学生は、四分の一程度である。学生の中には、文単位で話せず、すべて単語で答える学生もいる。

会話テストでは、テストで話されるトピックと採点基準が事前に提示されている。このテスト方法には、一つのトピックについて教師が質問し学生の答えに応じ関連質問を行うタイプと、初級で習得してほしい場面会話のロールプレイをするタイプとがある。テストでは、教師の日本語は学習した範囲の語彙・文型を用い、コントロールされた状況を作り出しているのである。学生は準備として各自応答練習を行い、教室でも教科書の各課に「話す」ためのタスクがある。この結果、答えないという状況は脱しているが、中級以上へつなげるためには何かの工夫が必要な段階であると思われる。

次に、交流授業でのパフォーマンスの観察から見られる問題点は、相手の話を聞き、自分の話を聞いてもらうという、会話でのインターアクションが少ないグループが少なからず見受けられることである。他の学生や参加の日本人を無視して、自分の話したいこと、話せることを一方的に話し、他のメンバーに対する配慮がない。このような学生がいる一方、日本人が話していることに対し、質問がある、あるいは、続いて自分の経験などを話したいなどという状況においても話に入っていくことができず、ひたすら相手の話すことを聞き続けるという学生がいるのである。

授業での事前の用意では、交流での話題について話す内容を用意し、表現を学習し、クラス内で話す練習をしている。しかし、留学生同士での微妙な分かり合いでの進行とも、教師によるコントロールされた状況とも違う状況が、交流授業では起きている。つまり、授業では、教師が質問し、学習者が答え、さらにまた教師が質問するという決められた発言順番があり、学習者同士もどちらが話すかに暗黙の決まりのようなものがクラス内活動の積み重ねの中に存在している。一方、交流会では、このような状況とは異なる状況があり、初級の学習者の対応は難しいものがあるようである。

発話能力だけが優れても実際の会話の中でその能力を発揮できず受け答えがうまくできなれば、話すことで得られる新しい考え方、情報を得ることができず、上手に受け答えができていても知っていることをうまく表現できなくては、話し手の言いたいことは相手理解任せになってしまう。これでは、日本で学ぶというせっかくの機会により、日本を理解し、日本人に理解してもらうという意味がなくなることになる。初級終了の学習者の大部分がこの状況を脱すれば、日本語学習の意義が大きくなると考えられる。

以上をまとめると、段落で発話する能力と会話を運営する能力の両面を理解し、練習する必要がある。具体的には、一回の発話量が増えるためには、トピックに関する語彙が増えていくことと文と文をつなぐための表現とテクニックが必要である。また、会話でインターアクションの重要性を理解し、相づちの打ち方、相手の発言の促し方、唐突にならずに発言をする方法などを学び、使えるようにすることが必要である。

3. 既存の中級テキストでの会話の扱われ方

さて、上で述べた発話能力と会話運営能力の問題点に関して、既存の中級テキストではどのような事柄と練習を提示しているのでしょうか。なお、本論でいう「中級テキスト」とは、初級課程修了を前提とし、初級終了直後150時間ほどを想定しているテキストである。ここでは、『とびら』と同じく読み物本文に付随し、聞く、書く、話すがある総合テキストを検討した。²

参考にした総合テキストを見ると、口頭表現能力について特に意識していないものが多い。さまざまなトピックが読み物により提示され、そのトピックにあわせて文型、語彙を練習するという構成になっている。つまり、トピックにあわせて、話せそうな事柄、話題について話すという形である。

中級は、初級で学んだことを整理しながらさらに日本語の理解を深め、さらにアカデミックな日本語または目的にあった日本語へ向かうための基礎固めの段階である。文法とともに他の能力についても中級でどのような能力が身につけているべきかという観点から、能力を細分化し、能力養成のための中級に適した練習段階の組み合わせを考える必要があるのではないだろうか。

初級修了者のための会話練習案
『日本語5つのとびら - 中級編』での試み

総合テキストの性格からするとトピック中心に組み立てることが、教科書全体を構成しやすいことは理解できるが、そのような制約の中でも、たとえば、段落での発話と会話運営を意識した教科書を考えるなど能力養成を考えることが必要なのではないだろうか。会話の練習はしているのに、何か上手になった気がしないのは、練習の繰り返しのうちにゴールが見えにくいからではないだろうか。教えるほうも練習する方もゴールを意識しながら、練習していく必要があるのではないだろうか。

能力は一朝一夕には身につかない。目標とする能力を繰り返し練習していくことが必要である。さらに、限られた時間の中で一定の成果を得るためには、それだけでなく、最終目標に向かって積み上げる必要がある。それには、練習の順番などを設計しなくてはいけないのではないだろうか。

筆者は、『とびら 中級編』の会話部分を担当するに当たって、以上のように考えた。

4. 『とびら 中級編』での試み

ここでは、第2節で述べた初級学習者の問題点を解決するために、『とびら 中級編』で行った試みを紹介する。

『とびら』開発以前の日本語コースの問題点は、各レベルのつながりがスムーズであるとはいえない状態であったことである。そのため、『とびら』の開発では、特に、「聞く、読む、書く、話す」の各技能が、初級から段階を踏んで繰り返し説明され練習していくという一貫教育の長所を生かすカリキュラム、教科書が必要であった。

具体的にいえば、本稿でのテーマである「話す」という点では、「専門の簡単なトピックについてディベートできる」ということを最終目標としている。そして、この目標に向かって、上級で「調べたことについてプレゼンテーションができる」、中級では、「身近な話題についてスピーチできる」、初級では、「日本で生活し、学生生活を送るために必要な表現が使える」を設定し、段階を追って必要な事柄と能力を養成するように設定した。

4.1 中級の教科書での練習

上で述べた発話能力と会話運営能力の問題点を考慮し、初級学習者の問題点を解決し、上級の最終目標へつなげるために、テキストの構成を検討した。そして、練習内容ばかりでなく、練習のさせ方についても工夫をすることにした。

練習内容のポイントは、段落の形を意識すること、話すためによく聞くことを意識すること、相手や場面での違いを意識すること、三点である。この三点は、上級の話し方ができるために必要な事柄である。段落を意識することにより、話す内容が詳しくなる。そのことにより、聞き手の理解を深めることができるようになる。また、話す活動そのものに慣れていないと、話し手は内容をどう表現するか集中してしまい、聞き手の反応に気がつかず、話題の流れがつかめないという状況に陥る。しかし、よく聞くことが話題の流れをつかむことになり、自分の話す順番をとることにつながるようになる。そして、相手や場面の違いを意識することで、会話の進行を理解していく必要を理解していくことになるのであるが、それに気がつかない。

内容ばかりでなく、練習も一つの教科書の中で各課の内容が段階を追って難しくなるよう工夫をした。なぜなら、目標は理解することではなく、「できる」ようになることであるからである。そのため、学習者が実際に話してみることができることを自覚しながら、学習者自身ができるためにどのようにしなくてはいけないかを理解して必要があるからである。

以下、具体的に述べることにする。

4.2 練習内容の工夫

段落の形を意識すること

初級終了時の文レベルの発話から、はじめ・中・終わりのある段落レベルの発話をできるように、

次のような段階を考えた。

課	提出場所	内容
1	ヒント	「はじめ」「中」「終わり」を作ることを意識
2	ヒント	「はじめ」「中」「終わり」での表現の確認
4	ヒント	会話の進め方とその表現の確認
6	ヒント	手順を示す接続詞と表現
8	全体	これまでのまとめ

1課では、自己紹介スピーチをするが、「はじめ」「中」「終わり」を作ることを意識させる。次に、2課での略語について簡単な報告でも、1課に続き「はじめの言葉」、話す内容、「終わりの言葉」で、どのような表現を使うかについて確認をする。4課での教師に対する推薦状依頼のタスクでは、「話しかける」、「前置きをいう」、「用件をいう」、「会話を終える」というフォーマットを意識させ、それに基づいてタスク会話を進めるようにしている。さらに、6課の飲み物や食べ物の手順を説明するタスクでは、手順を示すのに必要な接続詞、順序を示す表現を説明、練習する。最後に、これらの練習をまとめるために8課のスピーチをする。

学生が目標の事柄が「できる」ようになるために繰り返して行うように設定した。これはつまり、繰り返しになるが、目標に向かって少しずつ段階的に提示し、復習しながら少し上のスキルを練習しておき、形を変えながら何度か同じやり方を繰り返すことにより、使えるようになると思えるからである。

話すためによく聞くことを意識すること

各課で取り上げた内容の一覧は次のとおりである。

課	提出場所	内容
1	ヒント	自己紹介を聞いている人が気をつけることを考える
3	ヒント 話しましょう	自分のターンを取るために、あいづちから入る方法を提示する。 あいづちからターンを取る練習。
5	話しましょう	聞き手は、スピーチを聞きながら、そのトピックをメモする。 話し手は、聞き手からのスピーチに対する質問をメモする。
6	話しましょう	聞き手は、スピーチを聞きながら、そのトピックをメモする。 話し手は、聞き手からのスピーチに対する質問のメモを取る。
7		グラフの説明を聞きながら表現のチェックを行う。

1課では、自己紹介を聞いているとき何に気をつけたらいいかについて考える。この課の「日本語を知ろう」で紹介されたあいづちについて、実践を促すためである。「あいづち」を打つのはできるようになっていても、それから自分の発話に入るのは難しい。そこで、3課では相手の話に対するあいづちとともに感想を述べて、ワンクッションをつくり、自分の話に入ることを学ぶ。さらに、練習により、実際のタイミングが取れるようにする。

また、後半に入ってフォーマルな話し方になれるために、5課では、まず相手が話したことをメモすることを練習する。単語でいいのでメモを取ることでよく聞く態度を身につけるようにする。この練習は、6課でも同じ作業をすることにより、スキルとして定着させることを狙っている。これは、上級での講義を聴くというアカデミックな能力の基礎となる。そして、7課では、お互いがグラフの

初級修了者のための会話練習案
『日本語5つのとびら - 中級編』での試み

説明をするだけでなく、表現チェックをすることにより、チェックしたりアドバイスしたりするためには、よく聞かなくてはいけないことを理解する。このことは自身の表現の振り返りにもなる。

相手や場面での違いを意識すること

課	提出場所	内容
2	ヒント	相手により、質問の仕方、表現がどう違うか考える。
4	ヒント	先生への依頼会話をするための表現を考える。
8	ヒント	発表でのエチケットを考える。

2課で、質問する相手との関係により、質問の仕方、表現が違うことを確認する。聞いてなんとなく知っていることを自覚し、しかも略語を調べるというタスクを通じて、初級で学習していることがさらに確実なものにする。4課でも、敬語使用の実践練習をする。教師という相手、依頼をするという内容が敬語を要求していることは理解しているが、確実に使えるために、学生の多くが必要となる推薦状を依頼するというタスクで実践する。また、実践の中で依頼が完成するためには、相手の事情を考慮して、たとえば、2週間前ぐらいには、まずメールで打診するなどの言語以外の事柄も学習する。

後半のテーマであるフォーマルな場での発言は、8課で行う。ペア活動やグループ活動と異なり、一対多での発表形式でのパフォーマンスを学習する。上級でのプレゼンテーションの準備でもある。それぞれのレベルでは、すぐ上のレベルの準備活動も取り込み、スムーズなレベルアップができるよう工夫した。

4.3 練習の仕方の工夫

以上のような、練習内容の工夫ばかりでなく、次のような練習の仕方の工夫もした。

表現を与えるのではなく、試行錯誤のタスク先行型による練習を行うようにした。このことは、話すことを目標にしているからである。中級以上では、準備がある程度必要なトピックについて話すので、まず原稿を書きそれを読むということで話すタスクをこなしがちである。それをさせないために、話す内容についてメモを取ることをしても原稿を書くことは後半に入るまでしなくてもよいようにした。

総合教材のよさを生かし、教室では話すことに集中できるように、会話のトピックはメインの読み物のトピックと関連させ、読む作業の中で学習したこと、話題に上ったことを表現練習で扱うようにした。このことにより必要な語彙を改めてすべて導入するという手間を省くことができる。また、各作業と連動し、その表現が定着できるように工夫した。

一つの課の中で、「話し方・聞き方のヒント」「話す前に」「話しましょう」「話した後で」「もっと練習したい人に」の五つの段階を設けることで、授業で行われる「話しましょう」の前後を学生自身が自習できるようにした。これは、話せるためにどのようなことを準備していけばいいかを学習し、テキストで取り上げたトピック以外についても、話せるようになってほしいからである。

このような練習のさせ方について工夫をしたのは、次のような理由からである。話す内容が長く複雑になると準備が必要になる。しかし、書いたものを読んでいては、話しているとはいえない。「話しましょう」で実際の会話活動に入る前は、十分な準備をすることが必要だが、活動では瞬発力でこなすという経験を積んでいくことが、「話すこと」が身につくのである。各課の構成の中で、段階をつくることにより、どのように用意していけばいいのか、どの段階が弱いのかも学生が分かってくるからである。

5. まとめ

以上、初級修了学生の口頭表現での問題点について述べ、その問題を解決するための『とびら』中級編における、段階をつけて積み上げていくという工夫について述べた。

初級終了の学生には、文以上の長さで話すことが難しい学生もあり、上級へ行くためにも段落をどう作っていくのか、を練習する必要がある。また、単に相手の質問に答えて、相手の話を一方的に聞くというのではなく、会話での積極的な関与が必要であることも知り、練習する必要がある。

『とびら』中級編では、練習に段階を作ること、連携させることを作成のポイントとし、繰り返すことにより理解するだけでなく、実際にできるようにし、次の会話のために何をすべきかを学習できるよう工夫した。

今後の問題点であるが、中級編にだけについて言えば、全8課で練習できた事柄は日本語の基礎としてはまだまだ足りない。例を挙げれば、6課の手順を示す練習では、お茶の入れ方など飲み物食べ物の作り方を示したが、さらに、学生が生活の中で説明しなくてはならないことに関してどのような手順を示すかを練習として取り入れていかななくてはならないだろう。それにより、手順を示すということの意味が理解でき、上級でのプレゼンテーション、さらにはレポートの作成などにおいても、読み手聞き手があってコミュニケーションをしているのだと意識ができるようになるのではないかと考えている。

中級以後の口頭表現能力の養成としては、中級編は中上級編でアカデミックなトピックについて話すという段階への橋渡しの段階である。必要な表現の学習とともに会話に対する意識を学ぶことができていると思うが、アカデミックな事柄を整理し表現していくための基礎固めとしての観点からは十分ではないと思われる。ここで工夫した段階をつけて考える、手順を踏んで作っていくということが学習者自らできるような練習も必要ではないかと考えている。そこにつながる方法をこれから考えていきたい。

本稿は、2008年3月15日東京国際大学において開催された第30回日本語教育方法研究会での発表を基に作成したものである。

注

1. APUでは、中級へいく条件として日本語能力3級(学内用)の合格が必要なため、初級ではこれをカバーする文法・文型表現は理解できているはずである。
2. 参考にした初級終了後の主な教科書は以下のとおりである。
文化外国語専門学校編 1994 『文化中級日本語』 凡人社
土岐哲・関正昭・平高文也・新内康子・鶴尾能子1995 『日本語中級J301』 スリーエーネットワーク
東京外国語大学留学生日本語教育センター編 1994 『中級日本語』 凡人社

初級修了者のための会話練習案
『日本語5つのとびら - 中級編』での試み

参考 『とびら 中級編』の概要 (別冊として「漢字・語彙練習」用の教科書がついている。)

1 各課の活動目的と「話す」目標一覧

課	目的	目標
1	自己紹介をする	「はじめ」「中」「終わり」のあるスピーチをする。話を聞いている人はあいづちをする。
2	略語について調べて発表する	いろいろな日本人に略語についてインタビューし、結果を分かりやすく発表する。
3	日本に来てから経験した「困ったこと」について話す	あいづちから、自分の話したいことをスムーズに話し始める。
4	先生との会話	適切な敬語を使った会話をする。
5	書いたスピーチを発表する	発表を聞いて、自然な質問の仕方を練習する。
6	自分の国の飲み物や食べ物について発表する	順序を表す表現を使って食べ物・飲み物の作り方を説明する
7	図・グラフを説明する	「書く」で書いた図・グラフの説明をグループに発表する。(話し言葉と書き言葉の違い)
8	日本に来てから自分が変わったと思うことについて話す	理由を示しながら「はじめ」「中」「終わり」がある1分程度のスピーチをする

2 各課の構成

「聞く」、「読む」、「日本語を知ろう」、「表現練習」、「文法・文型練習」に分かれている。

「話す」は「書く」とともに「表現練習」の中にあり、タスクの性格によって「話す」と「書く」の出現順が異なる。

3 各課での「話す」の構成

話し方のヒント...目的を達成するために知っておくべき表現の確認。新たなスキル(あいづち、質問の仕方等)の紹介。

話す前に...話す内容に関してブレインストーミングを行う。

話しましょう...実際に話す活動をする。

話したあとで...学生各自の活動の反省点と次への課題を意識するための項目。

もっと練習したい人のために...授業での活動から進みたい学生のためのヒントとして付け加える。